【第15回神戸大会予稿】

三浦確爾と三浦浩

～父から子へ受け継がれた性質～

山　本　光　矩
一般社団法人秋田県聴力障害者協会

あらまし：三浦浩の父である三浦確爾は何者だったのだろうか。三浦確爾は三浦浩にどの様な影響を与えていたのだろうか。

1．三浦浩が聾唖界の重鎮、巨星と呼ばれる程活躍できた理由を探る為、親からどんな影響を受けていたのか、調査し、考察することで、三浦浩の内面を知ることが狙いです。

その為には三浦浩の父である三浦確爾を調べることで三浦浩の人格形成と生き様を調べてみたいと思います。

2．三浦浩の父である三浦確爾について

まず、三浦確爾の評価については以下の文献にこの様に書かれています。

嘉永６年（1853年）４月16日、盛訓の次男として出生、明治20年（1887年）分家して現金足轄町、三浦伊一郎へと続いている。

確爾号を秋嶽と称し漢籍に精し、嘉永６年４月本村黒川に生れ、三浦伊右エ門（現代兼蔵の家）の二男なり。性機敏闊達（かったつ）にして頗（すこぶ）る大勢に通じ公共事業に熱心なり。明治９年第一大区第七小区勧業係を命ぜらるるや、其の筋に建白して桑樹並びに果樹栽培を奨励し、自ら費を投じて其の苗木を買い入れ、所在希望者に頒与して之を勧興せり。本群に於ける斯業の今日は抑も茲に胚胎せるものなり。郷里に於ては部落民をして副収益を得しめんと欲し、生家に交渉して約二十町歩の原野に栗を植え付けたる結果、今日に於て栗の実年額百二、三十石、其の価六、七百円の収益を見るに至れり。又同部は本村内に於ける馬産地の一なるが、往時は野獣の被害恐れ、放牧に困難を感じて余り牧馬飼養を好まぬ傾あり。従って斯業意の如く発達せざるを憂い、如何にして此れ有利の業を盛ならしめんと欲し、種々苦心し、遂に監視夫を附して深山に放牧するの計を立て、一同に之を説示して実施したるに其の結果、馬匹生育の状態佳良にして、農民飼養の手数を省く等成績大に良好なりければ夫れより何れも安じて牧馬を飼養する様になり、遂に今日の如く年々価格千円以上の収益を得るに至れり。此の外、氏の功績として最も大なるは水門築造の一事なり。元来黒川は耕地の割合に灌漑用水少なき為、年々水不足を来たし、

甚しき時に相仇視し誠に忌まわしき有様を現出すること屢々（しばしば）なるを見、自費を投じて水門を築き、以て耕地灌漑の便を開き其の困難を除却せり。爾来本部落のみならず其の以西片田、福田等に至る迄用水に苦しむことなく、安じて田地を耕作することを得るに至れり。是れ偏に氏の公共心が生み出せる恩恵に他ならず、其の功績大なると言うべし。
（出典『秋田市金足黒川三浦家代々記』）

三浦浩が失聴した翌年の明治23年には第一回秋田県国会議員選挙が行われ、三浦確爾は発起人の一人として選挙活動を展開していました。
（出典『秋田縣政史　上巻』）

明治27年11月に秋田県議会員に補欠当選し、県議となり、任期が終える明治30年まで続けました。
（出典『秋田縣政史　下巻』）

三浦確爾は実業家であり、政治家でもあったのです。三浦浩は父の輝かしい功績を誇りにしていたのだろう。

3. まとめ

三浦確爾と三浦浩は親子揃って文才があり、機敏闊達であり、何らかの形で困窮している人々の救済に役立てようとする志があり、大局を見極めた上で貢献するというやり方はやはり親子であると感じられ、三浦浩は父のやり方を手本に聾唖界の発展に尽力していったのではないでしょうか。

そういう意味では三浦浩は「父の背中を見て育つ」ことによって東京聾唖倶楽部、日本聾唖協会、東京楽善合資会社、全日本聾唖連盟等の設立の中心人物として、聾唖界の発展に貢献する事が出来たのだろうと思います。

○引用文献
「秋田市金足黒川三浦家代々記」
「秋田縣政史上巻」
「秋田縣政史下巻」
「大正期の聾唖者による東京楽善会合資会社設立の経緯と理念 - その事業の性格と聾唖者教師・三浦浩の自立像 - 」
「関東ろう運動60年のあゆみ」
「藤本敏文」